

マッセ・市民セミナー
(NPO法人ちゃいんどネット大阪共催)

「発達障がいの理解と支援」

開催日：平成26年7月28日（月）

会 場：大阪市立鶴見区民センター 小ホール



「発達障がいの理解と支援」

伊丹 昌一 氏
(梅花女子大学心理こども学部 教授)

4

1. はじめに

発達障がいの支援教育に関しては、制度は変わっていきますが、基本的なところは変わりません。子どもが困っていることの原因にはさまざまなものがあります。例えば、愛着に課題がある愛着形成不全がありますが、そこへの関わりには発達障がいの理解と支援の仕方が非常に有効であることが分かってきています。

困っている子どもは発達障がいだけではなく、経済状況が非常に悪い子どもなどもおり、原因はさまざまですが、今日は、それらに共通する発達障がいのような特性のある子どもたちの理解と支援についてお話しします。

私が勤める梅花女子大学はテアリーディングが有名で、毎年世界大会やアジア大会で優勝したりしているのですが、今年はアジアで2位になってしまいました。それはすごいことなのですが、選手たちは不満のようです。

また他に、アニマルセラピーの授業があります。アニマルセラピーと聞いたとき、私は心理学科にしながら信じていなかったのですが、学生には人気があります。保育園や幼稚園、茨木駅周辺に犬を連れていっても、犬は吠えも、噛みもせず、大きな動くぬいぐるみのようで評判がいいです。実際の授業でも犬を使っています。学生たちは本当に熱心で、立って受ける人がいるほど好評な授業です。

私は女子大で教えた経験がなく不安でしたが、学生には本当に一生懸命受けてもらっています。

学生の中には、障がいの診断名のある者もありますが、生まれながらの困難に負けることなく毎日生き生きと過ごしています。大学でも、そういう学生たちを支援しています。個に応じた支援が就学前から小学校、中学校、高校、大学とつながっていくと一番いいと思うので、ぜひ早い段階から子どもたちの困っ

ているというサインに気付いて、支援していければと考えています。

2. 子どもの気になる行動

私は大学での授業の他に、巡回という形で保育園や幼稚園などに行く機会がよくあります。その中で、最近本当に気になる子が多くなります。例えば、外に行くとなんとどこかへ行ってしまふ。よかれと思って「僕、元気？」と話し掛けても、感情を逆なでするように「うるさい、おっさん」と言われる。それから、感覚過敏の状態なのですが、大きな音を嫌がる。絵本などの読み聞かせに興味を示さない。折り紙やパズル、ぬりえなどが苦手。苦手だけならいいのですが、それでパニックに移行する。知らない所、特に初めての所に行くことをものすごく嫌がる。友だちとうまく遊べず、自分の気持ちを上手に伝えることができないので、すぐたいたり引っ張ったりしてしまう。

3. 気付きの大切さ

そういう子どもたちをどう捉えるか。気になる行動があると、「障がいがあふのではないか」「親はどう関わっているのだろうか」「先生はきちんと見てくれているのだろうか」と、つい子どもの行動とは全く関係ない誰かを責めてしまうことも多いです。巡回していて一番気になるのは、子どものことを考えて、精いっぱい汗をかいて関わっている保育士さんや幼稚園の先生、そして母親が、自分の育て方が悪いから、保育の仕方が悪いから子どもがこうなるのではないかと、自分を責めていることです。しかし、そうではありません。気になる行動を見たら、子どもが困っているサインだと捉えてください。

保育や教育に関わる者が大事にしなければならないことは、その子が何という障がいかということではなく、その子が困らないようにする方法は何か、これを明確にすることです。子どもは何であつてもよくて、障がいがあつてもなくても、どこで生まれようとどこで育とうと、そんなことは全く関係ありません。どの子どもも大事な一人の子どもに変わりはありません。なのに、何という障がいかを追求することで周りとの関係性が悪くなって、個人攻撃の畏、誰かを責めてしまうという悪い方向に行く可能性があります。そうではなくて、子どもが困らないようにするためにはどうすればよいかを、徹底的に考えていかなければいけません。今気になる行動をしている子を、困った子だと思ふの



ではなく、その子が困っている、ということに気付くことが大事なのです。先ほど示した行動は、一見すると小さい子どもなら誰でもするような行動かもしれませんが、僕が見ていると、大抵それは困ったときのサインです。これを上手にキャッチしていくことが非常に大事だと思います。

学校では、平成19年から特別支援教育が完全実施されています。それが今度にはインクルーシブ教育システムに変わっていきますが、そうなってもそれほど変わりません。通常学級の中で、どの子にも当たり前に教えていくことが特別支援教育であり、インクルーシブ教育システムです。ですから、診断があって支援教育を始める、診断があるから支援するという考えではなく、まず支援者や親御さんが子どもの困り事に気付くことから始まるのです。

4. 困っていることの原因は？

そうは言っても、毎日の集団生活の中で子どもが困っていることには、いろいろな原因があります。例えば、月齢差があります。特に年少さんでは大きく、0歳児から保育している保育士さんはよくお分かりかと思いますが、早生まれか遅生まれかだけで全く違います。遅生まれの子は、ある年齢までは幼くて当然ですが、ずっと幼いままだと遅れの可能性もあります。それから、不器用さがあります。最近特に外遊びの機会が減っている世の中ですから、不器用になっている子が多いと思います。また、対人関係力の弱い子、コミュニケーション力の弱い子、感覚にトラブルのある子がいます。

これらの特性の中には、先ほどは診断ありきではないと申しましたが、医療機関と連携することで困難の度合いが、必ずではありませんが軽減することもあります。ですから、私たちは医療関係者ではないので、医療機関につなぐことを考えなければいけません。でも、保育や教育の役割は、決して診断につなぐということではなく、まずは支援をする、配慮した保育をすることです。そこから始めて、経過の中で共通理解を得て医療機関につないでいくことを考えないと、ファーストタッチでボタンを掛け違えると最後までうまくいきません。

私はよく相談にも入らせていただいている、そのことを強く感じます。親以外で初めて出会う社会的な環境、初めて出会う保育士さんや幼稚園の先生方の役割は、この部分で子どもにとって非常に大事だと思います。そういうことを踏まえながら、やはり困っているのだなと捉える。原因にはさまざまあり、そ

これはまず支援してから考えていこうかというふうに行っていいと思います。

5. 発達障がいについて

困っていることの原因の中で、最近とても気になるのが発達障がいです。私が言うまでもなく皆さんは十分にご存じかと思いますが、今日は簡単に発達障がいについて説明します。

最近の診断基準では、「発達障がい」という言葉自体を、「発達症」と読み替えてもいいというレベルにきています。障がいに関する考え方が、変わってきているのです。最近の医療では、超早期に1,000g以下で生まれた子どもも十分に育つという話をしました。今は、どんなに困難な状態で生まれてこようと、生まれてきたその子のことを障がい児や障がい者とは言いません。すぐに障がいとは言わず、生きていく上で何らかの不都合を本人が感じている状態、やりにくさがある、社会との相互作用で不都合を感じる状態を障がいと言います。このところには結構誤解があって、障がいと言うと困難を持っている人のことだと思われがちですが、そうではなく、障がいというのは困っている人の状態を表す言葉なのです。従って、今後は発達障がいも、障がいとは表記しなくなると思います。

発達症といわれるものには、ADHD、LD、ASDの三つがあります。まず、ADHD（Attention Deficit Hyperactivity Disorder）です。日本名は注意欠陥ではなく、完全に注意欠如と読み替えることになりました。多動性障がいも、確定ではありませんが多動症と表記されるようになるでしょう。それから、LD（Learning Disabilities）です。これにはいろいろな種類がありますが、学習障がいまたは学習症です。そして、ASD（Autistic Spectrum Disorder）は、自閉症スペクトラム症または自閉症スペクトラム障がいです。アスペルガーはどこに行ったのかと思われるでしょうが、広汎性発達障がいや高機能自閉、アスペルガー、自閉などは全て同じ仲間、一つにまとめられてASDという言葉になりました。発達障がいはこの三つで、これに知的障がいを合併する子もいれば合併しない子もいます。



6. 発達障がいという視点

今、乳幼児期からの確定診断はとても難しく、医療機関でも悩みの種だと言われています。それは、保護者側の受容の問題も大きいからです。例えば、私は保育園で0歳児を見るときによく抱っこさせてもらいますが、必ず何人かは泣いて暴れて抱っこさせてくれません。自分の抱き方が下手なのかと聞くと、保育士さんが抱いても同じだそうです。ところが、脇の下に手を挟んで縦に抱っこすると、その子は泣きやみます。落ち着いたところでまた横にすると泣く。体をぎゅっと引き寄せると僕の体を押しつける。これは感覚過敏です。ASDの子どもたちの特性として、生まれながらに感覚過敏が合併しやすいといわれているので、もう0歳児の時点で分かるのです。ずっとその子のそばにいて、一生支えることができるのなら、僕は一刻も早く保護者に子どもの困難な状態を言います。しかし、それは無理な相談で、1回抱っこしただけで7か月の赤ちゃんの母親に「この子はもしかしたらASDかもしれません」などとは言えません。6か月健診前の3か月、4か月のときから目が合わない、対人関係、感覚の問題があるということは分かるのですが、受容の問題は医者や医療機関でさえ難しいのです。だから、保育や養育、療育に関わる皆さんは、そのような視点で捉えるのではなく、特性のある子どもと理解して、少し広く考えて捉える必要があります。

今分かっていることは、発達障がいには生まれながらの特性があって、わざとや勘違いで変なことをするわけではないということです。しかも、その変なことも、決して変なことではないのです。見え方や聞こえ方、感じ方が、発達障がいでない子と少し違っているだけなのです。何回も言いますが、生まれながらの特性なので、わざとではないし、勘違いでもありません。対応としては、よく見て、よく聞くことです。「もう少し我慢なさい」と言ってしまうがちですが、これだけではやはり難しいです。

この辺はどの本にも書いてあることですが、あえて私が言いたいのは、子どもは障がいがあろうとなかろうと、どこで生まれようどこで育とうと、みんな同じ存在なので、みんな同じように扱ってほしい。障がいがあるからということで大目に見なくていいということです。つまり、子どもが良くないことをしたら毅然と、当たり前前に叱るということです。そこに障がいがある、愛着に課題があるということは関係なく、悪いことをしたら当然叱る必要があります。



障がいがあるということで、支援することに少しひるんでいる方を目にするがありますが、みんな同じ子どもです。いいことをしたら当然褒め、悪いことをしたら当然叱るという当たり前の対応をすればよいのです。ただ、それは子どもたちの特性を把握した上でやらないと誤解を受けることがあるので、子どもの学び方の特性には気付いていただかなければなりません。そして、学びやすい方法を丁寧に教えるという対応を、ぜひ心掛けてください。

7. LDによく見られる特性

まずはLDです。LDは就学前の段階では気付かれにくいのですが、よく注意して見ていれば分かります。こんな子どもはいませんか。聞いても意味を理解できない。何か言いたいことはあるのに上手に話すことができない。たどたどしい、滑舌が悪い。拾い読みや行を飛ばして読む。これは学校に行ってから課題です。誤字や脱字が多い。計算や図形問題を解くことが難しい。はさみやのり、ボール等がうまく使えない。このように不器用さで困っている子どもも、LDと判断して支援の対象にしています。このような特性をご覧になられたら、同年代の子と比べて顕著にそれが目立つようならば、その子もしかしたら生まれながらの特性で困っているのではないかということに気付いてあげてください。ここで間違えないでください。「LDなのかな」と気付かなくてもいいのです。

ここに、「廊下」という字があります。利き手と反対側の手で鉛筆を持って、できるだけ早くこの白抜きの文字をなぞってください。急いでください。10秒間です。正しく、できるだけ上手に書いてください。きれいに書かないといけませんよ。はい、どうですか。焦ってしまい、腹が立ちませんでしたか。

では、今度はもう少し大きくなった「廊下」という字があります。今度はこちらの文字を、利き手に鉛筆を持ち替えて、できるだけ丁寧にゆっくりとなぞってみてください。急がなくていいです。ゆっくりで結構です。できるまで待ちます。なぞれましたか。もうほとんどの方の手が止まっています。素晴らしいですね。先ほどの時間とそれほど変わりません。この方が大きくて、鉛筆の芯を使う面積が広いにもかかわらず、それほど時間がかかりません。

LDといわれている子、不器用さがある子は、特にこのような、ものを書くことが苦手なのです。そして、周りはどうしてもプレッシャーをかけてしまう



のです。特に家庭でそのような場面が多いのですが、そこで失敗体験をすると「もう嫌だ、書けない」となってしまいます。そうではなくて、丁寧に書けばできるという自信を付けさせなければならないのです。やはり子どもというのは成功体験で成長します。そのことを覚えておいていただけたらと思います。

同じ課題でも、利き手と反対の手で「早く書け」とプレッシャーをかけられると、とてもやりにくかったでしょう。でも、利き手で、強い方の能力を使って、時間にも配慮されてゆっくり焦らずに書くと、ずっとうまくできたはずです。そのちょっとした違いが、LDといわれる子どもたちに求められているものです。

難読症、LDの中でも見え方に課題のある子は、二重に見えていることもあります。二重に見えたらつらいです。真っすぐ見えるものが曲がって見える子もいることが、脳科学の研究で分かっています。眼鏡をかけている方が眼鏡を外すとそのように見えると思いますが、一度も眼鏡をかけたことのない方は、そのように見える人がいるということ、自分が体験していないので気がきません。また、そのように見えている子は、はっきり見えている状態が分かりません。子どもには、そういうつらさがあります。実際に弱視の子などは、もっと見えにくい状態です。

それから、文字が反転して見えている子がいます。鏡文字というのですが、特に利き手を矯正すると起こりやすくなります。まるで「あ」を裏から見たように書くので、ふざけているのかと思われがちですが、ふざけては裏から上手に書けません。そのように見えているからだといわれています。子どもたちはそのようなことで困っています。

8. LD支援のポイント

そのような状態に気付いたら、ぜひ以下のような支援をしてください。「やればできるでしょ！」は逆効果になるので、できたことを褒めるという視点を多くしてください。学習に取り組まなければ叱らなければいけません、学習して、できたら褒めてください。それで失敗を恐れない態度を身に付け、チャレンジ精神豊かな子どもにすることが大事です。叱責ばかりを繰り返して失敗体験を重ね過ぎると、子どもはやる気をなくします。この動機付けの経過が一番難しいです。

さらに、最近、LD支援の研究で分かっていることは、訓練だけでは克



服できないということです。利き手と反対の手で廊下という字を素早く書けるように毎日1時間練習をして、それでできる人はできると思いますが、LDといわれている状態の子どもにはできないと言われていました。だから、バイパス行為、違う方法を考えます。今、国がタブレット端末の導入やICT機器の使用を積極的に進めています。失敗体験ばかり積むよりも、得意な方の力を伸ばして、それで弱い力をカバーするという考え方が強くなっています。そのような流れがあることも、知っておいてください。

LDには、見ても分からない、聞いても分からないなど、さまざまなタイプがあります。例えば、国語や理科、社会はすごく好きでできるのに、算数だけができない算数障がいというLDもあります。子どもは〇〇障がいではなくて、何に困っているのかを明確にすることが支援の第一歩です。

9. ADHDによく見られる特性

次にADHDです。多分、皆さんも必ず一度はこういうタイプの子どもに会ったことがあると思います。不注意な間違えが多い。落ち着きがなく、多動。順番が待てない。指示に従わず勝手な行動を取る。整理整頓が難しい。気持ちが優先してしまう。同じ失敗を何度も繰り返す。今、支援している子どもが目には浮かびませんでしたか。これは結構いろいろな人に当てはまります。僕も自分によく当てはまると思います。ADHDと診断される子は、こうした状態が同年齢の子どもと比べて非常に強いので、そこで見極めてください。

ここで、皆さんにADHDといわれている子どもたちの困難を体験していただきたいと思います。写真の一部が徐々に変わっていきますので注意して見てください。かわいい女の子がいます。分かっても答えは言わないでください。集中して見れば分かります。だんだん変わっていつているでしょう。では、ヒントを出します。上半分に注目してください。まだわからない方、頑張ってください。上の左側を見てください。変わっていつていますね。

答えはここです。いやらしいでしょう。僕はかわいい女の子がいますねと言ったので女の子を見られたと思いますが、男の子でした。帽子の色がだんだん赤から白に変わってきています。写真には情報がたくさんあるので分かりにくかったでしょう。でも、半分に切って、そのうちの左側ですよと、見るポイントを少なくすると、集中してご覧になって分かることができたと思います。



ADHDで落ち着きがなくて集中できない子には、子どもに頑張らせるだけではなく、集中できる環境にすることが大事です。それを言いたくて、この画像を見ていただきました。

10. ADHD支援のポイント

従って、ADHDといわれる状態の子どもに対しては、焦らないことが大事です。こちらが焦っては駄目なのです。「もう分かりましたか」と言われると、焦るでしょう。プレッシャーをかけないようにする。そして、できれば見て分かるような配慮をしてあげる。見通しが持てるようにするという意味です。見通しを持つというのは、終わりが分かるようにするということです。いつ終わりが分からないと、すごく不安になります。

それから、はっきりとした明確な言葉で具体的に話す。できるだけ刺激は少なく。そして、スモールステップで進めていく。先ほどから何回も言っていますが、子どもは成功体験で育ちます。できたらうれしいでしょう。今のも1回で分かったらうれしかったでしょう。また違うものも見てみたいと思います。

くどくどと叱責することは、あまり効果がありません。特にADHDというタイプは反発ばかりします。ADHDは叱らないといけないのですが、叱るときは個人的に叱る方が効果が高いです。みんなの前で叱ると、パフォーマンスが目立とうとして先生に歯向かったり堂々としたりするので、そういうことをできるだけ少なくするようにしてください。褒めるときはみんなの前で褒めてください。

それから、記憶に課題のある子には、思い出すことができるようなヒントを与えてあげることが大事です。

11. ASDによく見られる特性

次はASDです。自閉症というと知的な遅れがあって、パチパチと手をたたいて、ぴょんぴょん跳びはねて、同じ言葉を繰り返してというイメージを持たれるかと思いますが、ASDという概念に変わると違ってきます。そういう特性があっても、知的能力が非常に高い子もいます。興味・関心で意欲の差が激しくて、電車のことなら何でも知っているけれども、他のことには全く興味を示さない。その場のルールや約束に従えない。じゃんけんで、グーはチョキに



勝ちます。でも、なかなか決まらなくて多いものじゃんけんに変えて、チョキが多くてグーが少ないときに、そのルールについていけなくて怒る。特に勝ちにこだわるところがあります。こだわりで切り替えが難しい。1度はまったことからなかなか抜け出せない。一方的な会話になりがちで、会話がキャッチボールにならない。相手の感情や状況を考えずに話す。

僕は土日にこういう子たちを支援していて、子どもの頃から支援している子がそろそろ大人になりかけています。たまに会うと、僕の頭を見て「いつ死ぬの？」と言うのです。もうひっくり返りそうになります。でも、分かっています。それは僕が白髪になった、イコールおじいさん、おじいさんは先が短い、だから正直に「いつ死ぬの？」と聞くのです。だから、それは間違っていないのですが、そういうことをいきなり気にしている人に言ったら相手は傷つくだろうということが分からないのです。他者感情の理解が永遠の課題です。

また、皆さんに気を付けていただかなければいけないのが、周りが予測できない行動を取ることです。特に初めての場所、知らない場所に校外学習や遠足に出たときの様子が怖いのです。ある子が新大阪駅で、いなくなったと思って探すと、新幹線に乗っていました。不幸なことにドアが閉まって、動いている中から手を振ってくれたこともありました。そのときはそういうこともあるかもしれないと配慮をしていて、別の教員が次の京都駅に行っていて、駅員さんに連絡して、無事に引き取りました。そういう予測できない行動を想定して計画をつくっておかないと、子ども自身ではなくわれわれの方がパニックに陥ることがあります。

また、ASDの子どもたちは一様に、なぜか同年代の子より大人との関係、またはより年少の子どもとの関係を好みます。ですから、年長さんになったら下の子の面倒をよく見てくれるので、そんなことで対人関係に自信を持たせるということも一つかと思えます。

でも、この特性が意図せず頻繁に起こるのです。わざとではなく、わがままや勘違いでもないから、頻繁に起こるのです。それで、周りの子どもたちにおかしなやつだと思われてしまいます。われわれは理解しているので、あの子はああいう特性で困っていると分かりますが、子どもたちにはなかなか分かりません。ましてや、3歳児に、あの子はASDだからと説明しても、絶対に分かりません。理解の持っていく方が難しいので、こういう特性で非常に困ってい



て、場合によっては仲間はずれになり、極端な場合はいじめの被害に遭っていることが多いという現実もあります。

例えば、この写真をご覧ください。4人とも全く表情が違います。われわれは一番右端の眼鏡をかけた人を最初に覚えたら、あと3人も表情は違うけれども同じ人だと分かります。しかし、ASDの子どもは融通が利きませんから、母親の顔ですら分からないといわれています。朝、保育園に預けた後、美容院へ行って、帰りのお迎えに来たら、誰か分からない。それが相貌失認で、顔が覚えられないのです。だから人の名前が分からない、だから友だちができにくいという困難もあることが分かってきています。

脳科学の研究も出ていて、ASDでない人の脳を見ると、オレンジ色に光っている所は活性化していて、人の顔を見るときには紡錘状回という所が働きます。ところが、ASDの人の脳は、オレンジ色に光っている所がありません。同じ課題をやっているのに、違う所が青くかすかに光っています。つまり、脳の形は同じなのですが、使っている場所が違うのです。そういうレベルからの違いなのです。そのことを理解しないと、なかなか難しいわけです。

さて、この写真の女性が、こちらの写真ではどこにいるか分かりますか。見づらいですし、表情も違います。そうです、後ろから2列目、右から2番目にいます。こういうことが自閉特性のASDのある子は分からないのです。難しいです。だから、ASDの子どもには写真や絵カードが有効だといわれています。今のような見方をするとということを考えながら、写真や絵カードを使わないといけません。

ハンドルが真っすぐな自転車を見てそれが自転車だと覚えたら、ハンドルが曲がっているものは自転車ではないのです。だから、よくシンボルとか抽象的な絵を使うのです。あまりマニアック過ぎる写真や絵を使うと、それ以外になかなか緩んでいかないという硬さがあります。

12. ASD支援のポイント

ASDの子どもたちには、ぜひ落ち着ける場所を用意してあげてください。ASDの子どもたちは、生きづらいのです。わざとではないのにばかにされたり、誤解されたり、からかわれたりしています。特に幼児期、就学してからです。だから、自分の気持ちを少し落ち着かせるための場所が要るのです。どん



な場所がいいかという、狭い場所です。ASDの子どもたちは、よく椅子や机の下や何かの陰に入ります。狭い場所というのは、母親にぎゅっとさされている感覚と同じ圧迫空間なのです。そこで、いろいろなものを組み合わせて、ちょっとした隙間をたくさんつくってあげてほしいのです。それがASDの子どもたちの落ち着ける場所です。園長先生にお願いしてソファを買えと言っているではありません。そのような隙間を用意することが大事です。

それから、言葉の捉え方も字義どおりで驚きます。小学生に「疲れているから真っすぐ帰りなさい」と言うと、「僕の家は信号を三つ曲がらないと帰れない。なぜ真っすぐ帰らなければいけないのか。どこか違う家に帰れと言うのか」というレベルなのです。よくしゃべる子に、「おまえは口から生まれたのか」と言うと、僕は口から生まれたのかと、真剣に悩むぐらい真面目なのです。だから、そういう子たちに対する言葉は明確で具体的でなければなりません。一番いけないのは暗黙の了解で、明確なルールに変えて、見て分かるようにした方がいいです。「何回言ったら分かるの」と言う前に、1回書けばいいのです。

それから、始まりと終わりを分かりやすくする。例えば、ASDの子どもは、一筆書きの「し」を逆さまに、下のはねの方から先に書くことがよくあります。そういう字の書き方をしますので、「スタートは星マークだよ」と、「し」の上の所に星マークを書いて、ピリオドで「ここまでで終わるのよ」と示しておくとうまに書けます。上手に書けたという成功体験で、それを消しても1人で勝手に書けるようになります。始まりと終わりを分かりやすくしておくのです。文字指導もそのレベルなので、活動に対しては、特に初めての活動、子どもが苦手とする活動では、いつ始まっていつ終わるのかという見通しを明確にすることが必要です。

それから、たまにいいので、この子たちが例えばポケモンにはまっていたならポケモンを使った活動を考えることも一つです。それで「名前をよく知っているね」という見せ場をつくって、「すごいな」と思ってもらえるということによって自尊心が上がります。

また、よくパニックを起こすので、そのときどうしたらいいかと聞かれるのですが、パニックになったときは、われわれが深呼吸をして冷静になりましょう。パニックを起こしてしまったら仕方がないので、落ち着くまでそっとしておかなければなりません。われわれの方が、荒れている子どもを見てどれだけ



感情を高まらせないようにするのが大事です。新幹線に乗って手を振ってくれたときには、僕も笑顔で手を振っていました。もう乗ってしまったので、僕がどうしようとうろたえたら、きっと周りの子ども大変になったと思います。そのように、もしパニックになっても、とんでもないことが起こっても、冷静に対応することが大事です。

ASDの子どもたちは、本当に興味の幅が狭く、電車だったら電車だけ、虫だったら虫だけです。チョウチョにはまったら今度はガに興味に移り、ガにはまったら今度はアリに興味に移るといのように、まずは昆虫の中で世界を広げていきます。そのように、こだわっているものをこじ開けて少しずつ広げていく。そうすると、興味・関心はかなり広がり、研究レベルまで行く子もいます。大学の先生などには、先ほど言った特性を持っている人がたくさんいます。得意分野を伸ばして社会で自立している人は多いので、そこへどう持っていくか。子どもたちがどれだけ伸びてくれるか楽しみです。

13. 「気付き」が「支援」の始まり

ここまでは、発達障がいの子どもの概要でした。そういった特性がある。それは特性であって生まれながら起こる行動で、わざとではないし、勘違いでもないということを理解しました。「あれはADHDだから」「これはLDだから」「あの子はLDですね」と言うために特性を理解するのではなく、支援につなげるために理解するということです。

巡回相談で現場に伺うと、こういう特性のある子どもは1人や2人ではなく、30人学級では65%ぐらいいます。今日はこの子は大丈夫だけれど、この子は大変困っている。常に困っている状況を発信する子だけではなくて、日替わりで子どもたちはいろいろと困ったサインを発信してくれます。そういう子どもたちがかなりいるのだと捉える必要があります。

また、愛着に課題のある子どもを反応性愛着形成不全といいます。この子どもたちも発達障がいとよく似た行動をします。だから、子どものつまずきや困難さに気付いたら、それが何かではなく、何らかの支援が必要だということです。私たちにとって特に大事なものは、その子の障がい名ではなく、行動の見方、対応の方法、支援の仕方を検討することです。

障がいではなく、一人ひとりの特性について、共通理解を図っていかなけれ

ばいけません。ある先生がよく勉強していて「あの子にはこういう特性がある」と言っても、別の先生が「あんなものはわがままだ」と言うのでは、共通理解ではありません。ぜひこういう特性のある子どもがいて困っているという現実を、全ての方に伝えていただけるとありがたいと思います。

大阪府のモデル事業をしているある地域で、年間複数回、同じ園に入らせていただいています。そこでは巡回だけではなく、少し気になる子どもの保護者にも来ていただいて個別に相談したり、保護者に対する全体的な研究をしたり、保護者にも理解を促しています。それにより、個別の教育支援計画をつくる率がだいぶ上がっています。そのように、先生だけでなく保護者の理解、子どもたちの理解が共通にできれば、支援はスムーズにいきます。

14. 子どもの支援の基本的な姿勢

そこで、まず子どもを支援するときに必要とされる基本的な姿勢ですが、子どもに自信を持たせるということを念頭に置いた方がいいです。どの子にもプライドがあるので、自尊心に配慮する。特性のある子のどうしようもない行動に対して、みんなの前であまり叱り過ぎない。発達障がいは、常に誤解を受けています。少年事件が起こるたびに、しばらくして「精神鑑定の結果、あの子は発達障がいと診断されました」と報道されます。「普段はおとなしい子だった」というのは、気付いていなかったのです。もっと早く、事件を起こす前に気付いてやらなければいけないのです。

最初から問題のある子と決めてはいけません。特に就学前にそんなに危険な子はいません。ただ少し言葉が悪いとか、少し暴力的になっている子はいますが、それは二次的な症状、または愛着の課題だと思います。「アホ」と言うのは、ADHDだから衝動性だけで言うものではありません。衝動性の高さはありますが、「アホ」と言うのは悪気がある行動で、言っている内容は悪いので叱らなければいけません。その辺を見極めて、自尊心に配慮して、問題のある子と見ずに、感情的に対応しないことが大事です。

それから、できるだけ友人から孤立させない対応をしなければいけません。このようなことが今は本当に大事です。気になる子は個別に指導した方がいいのかというご質問を頂きます。マン・ツー・マンでつけられるほど保育士がたくさんいれば個別に指導すればいいと思いますが、先生の人数は限られていま



す。しかし見渡してください。保育園、保育所、幼稚園にはとてもいい先生がたくさんいます。同級生、お兄ちゃん、お姉ちゃんたちです。その子たちがお互いに指導し合えるようなシステムをつくればいいのです。子どもというのは、先生の声より子どもたちの声に反応するので、それを使うのです。だからこそ、友人から孤立させるべきではありません。

それから、安定できる人と場所を確保してあげてください。発達障がいのあるASD特性のある子どもは、「この人は嫌い」と決めたら、その人がいくらいい人でも徹底的に嫌いなのです。だから、「嫌い」と言われても、それは特性なので気になさらないでください。その代わり、園の中でも意外な人を好きになることもあります。その人が安定できる人になります。園全体で子どもを支援していくという視点に立ってください。

15. 子どもへの配慮・支援

子どもへの配慮・支援の詳細に関しては、まず実態把握をすることが大切です。行動だけが気になるのですが、やはりいろいろと情報を聞きながら、さまざまな観点から実態把握をする必要があります。園で困っているお子さんほど、その親御さんには、家では困っていないと言われるパターンが多いのですが、正直に「この子は困っているのではないかなと思うのです」と言えばいいのです。ここで、先生方自身が困っていると言っては駄目です。いろいろな行動をするのは、子どもが困っているからです。「家庭と園と連携して何かしていきたくて考えているのですが、ご家庭で気になる点はないですか」という形に持っていくといいと思います。

「昨日、雑巾を3枚投げました。今日は7枚投げました。家でこんなことはしていませんか」と聞いても「いいえ、お利口です」と言われるので、「今日、雑巾を投げる行動が見られて、少しつらい思いをしているのかもしれない。家で何かつらいサインを発信していることはないですか。あったら教えていただけたら、これからの支援の参考になるのですが」という持っていき方をしましょう。ここを間違えてはいけません。そのような形でいろいろな情報を集めていきます。

親は、わが子に障がいがあるかを大変気にしています。また、私たちはそれを言う役割ではないので、そこには触れなくてよくて、どうしたら子どもが困

らないようになるかを、親御さんに伝えてください。親御さんも、子どもを大事に思っているのです。

それから、低年齢からの支援が大事です。特に対人関係のコツや、社会での上手な振る舞い方などのソーシャルスキル（社会的技能）は、できるだけ早い年齢から始めた方が効果的です。

それから、いじめや不登校につながらないように、周りの子どもたちとの関係に留意して支援する必要があります。先生方の対応を周りの子どもたちは見ているので、何かやってくれたときに周りの子どもにこの子を理解してもらう最高の機会です。ピンチはチャンスです。そのときの先生方の対応をみんなまねます。「何をしているの？座りなさい」と感情的に怒ると、周りの子どももみんなそう言います。そうではなくて、「今はこの活動を続けます」と淡々と、そして毅然とどうしたらいいかを明確に伝えると、周りの子どもも同じように言ってくれるようになります。周りの子の理解は、先生の支援がモデルだということです。いくら「この子には手助けが要るので、お願いね」と頼んでも難しいので、先生の対応を見せるのです。常にそういう視点で、周りの子どもたちとの関係に留意してください。

また、ADHDは多動と言いましたが、一日中多動だったら死んでしまいますので、疲れてじっとするときがあります。LDで書けなくても、よく見ている場合、よくしゃべる場合があります。何かに興味を示さなくても、とても興味を示す部分があります。特にASDでは、一見否定的に思えることを前向きに見ます。多動はエネルギーが、ぼーっとしているのは小さいことを気にしない、衝動性が高いのはひらめきが強いというように、周りの子に説明していくことも一つです。

16. 行動面への支援

活動は、一つずつ先の見通しを持たせて示すといいと思います。それから、できるだけあいまいな表現は避けましょう。「ちゃんとしいや」では、よく分かりません。「ええ姿勢しなさい」も分からないと思います。「ちゃっちゃとせいよ」も分かりにくいです。「ええかげんにしい」「ああ、ええかげんにしてええんか」となりますので、あいまいな表現はよくありません。具体的に指示することが大事です。特に叱るときは、その言葉がそのまま強く頭に残ります。



それから、注意や注目が持続する手だてを工夫しましょう。本人の努力ばかり求めず、環境を変えることです。それから、問題行動よりも認められる行動に意識を向けましょう。それから、子どもたちの怒り、不安、やりにくさをまず受け止めましょう。つい家で叱られているから不安で、困っているのです。「そんな気分を悪くするようなこと言わんといて」ではなく、「そうか、つらい思いをしてたんや、嫌やったんや」と言えるかどうかです。

それから、問題を起こさない経験の積み重ね、成功体験が大切です。それから、してほしくないことへの対応には、一貫性を持たせてください。駄目なことは駄目で、いくら障がいがあるからといって、突然人を突き飛ばしてはいけません。それは生まれながらの特性ではなく、意図した悪いことです。そんなことをしたときは、「障がいだから」と放っておくのではなく、明確に叱らなければいけません。「今のは『どいて』と言葉で言いなさい」「そう、よくできました」と、毅然と対応しなければいけません。その勇気をぜひ持ってください。そして、悪いことをしたらどの先生にも叱られるという環境をつくらなければいけません。「あの先生では許されたけれども、この先生にだけ怒られる」となると、その先生はとても悪者になります。それから、突然の変更と無理強いは、できるだけ避けましょう。

ある一人親の家庭から相談がありました。子どもが部屋を片付けない。母親は子どもが学校へ行くまでにきれいに片付けをして、ご飯を作って、そして働いて、買い物をして、またご飯を作って、一生懸命頑張っています。でも、「先生、もうやっけてもらえませんか」と、この写真のように、子どもが毎日部屋を散らかしたままで、はり倒してやろうと思うそうです。これは一刻も早く支援しなければいけないと思いました。さて、考えてください。皆さんなら、この子にどうやって片付けさせますか。隣の方と一緒に考えてください。良い案はありましたか。

結果は、2週間できれいに片付けさせました。片付けられない子どもは片付けた経験がないので、完成形が分からないのです。母親に片付けたときの写真を撮ってもらい、6か所に取り付けて、その写真どおりに片付いたらその箇所の写真を外す。そして、6個のマスの中に1個丸をもらえます。その丸が6個たまったら、大好きな妖怪ウォッチのカードを1枚買ってもらえます。その子は必死でやり、2週間でできるようになりました。それ以降も、片付けて母親



に褒められたのがよほどうれしかったのか、至る所を片付ける片付け魔になりました。子どもはそのくらい変わるのです。

大事なことは何でしょう。この母親は「ちゃんとしといてや」「何回言うたら分かるの。ええかげんにせえよ」「片付けなさい」と抽象的な言葉を言っていたのを、「写真どおりにしなさい」と言うようにしました。それだけです。そのように、視覚的な手掛かりがあるとやりやすいのかもしれませんが。

保育園でお昼寝のときに、おもちゃが見えていると触りたくなるのが小さな子どもなのですが、すごいと思ったのは、おもちゃが見えないように隠して、さらに「おもちゃ、おやすみ」と書いてあるのです。子どもが触りに行こうとしても、「あ、おもちゃも寝ているからそっと寝させてあげよう。〇〇ちゃん、優しいね」と言うのです。こういう手掛かりの使い方も少しの工夫だと思えます。

こちらの写真もきれいに片付いています。ここでは、卒園した子の帽子や服やかばんを、片付けたモデルとして置いてあるのです。「どうやってやるの?」「見本を見て」と、何回も見本を見てやります。

こちら椅子がきれいに並んでいます。これは子どもたちだけでやりました。テープを貼って、そこに子どもたちの好きなキャラクターのシールを貼って、椅子にも同じシールを貼って、シールを合わせて置くだけできれいに並ぶのです。さらにそれをすごく褒めて、約1か月でシールを貼らなくても椅子を自分で並べられるようになりました。最終的にはテープがなくても覚えていて、自分の椅子をそこに持って行って、きれいに並べられるような学級になりました。支援で大事なことは、いつまでも手厚い支援をしないことです。できたら褒めて、それを少しずつ消して行って、最終的には何もなくてもできるようにする。それを「プロンプト・フェイディング」と言います。最初は援助をしても徐々にそれを減らしていくという概念です。

小学校になると、教室は非常にすっきりしています。今はユニバーサルデザインといって、落ち着いた子どものためだけではなく、全ての子どもが集中しやすい教室環境をつくらうという流れになっています。「一日一善」などといった標語や絵が書かれていない黒板や、カーテンが付けてあって中身が見えないようになっている収納ボックス、教壇を端にずらして黒板が視界に入ってくる配置といったシンプルな環境は、発達障がいのある子にとってはなくては



ならないことですが、他の子にとっても集中しやすい環境です。困っているのは発達障がいの子だけではないので、こういう視点で保育環境をつくっていくことが大切です。

こちらの中学校の教室は、「一日一善」という標語が書いてあるし、壁も汚れています。先ほどの小学校の教室の方が、集中しやすい環境です。

これは、少し姿勢が悪いですが、実は撮影する人がこのように手を置いて足を組ませて撮影しているだけなのです。人は見た目が9割と言われ、姿勢で誤解を受けることが多いのです。皆さんの園児たちは、良い姿勢で座りますか。座れない子は「座りなさい」と言っても座れないので、正しく座っているモデルを示すといいです。そんなことが大事だと思います。

見通しを持つということでは、時間割というのは月曜日から土曜日まであって、頑張って算数の時間が終わっても、まだ算数と書いてあるものです。発達障がいのある子が多いクラスでは、道徳が終わったら剥がす、生活が終わったら剥がすとしていくと、終わりが分かります。このようにすると見通しを持ちやすいので、動きのあるようにしていくといいです。

17. 厳しい周りの見方

そうは言っても、やはり発達障がいのある子には「ルールや約束を守れない」「自己中心的」「人の言うことを聞かない」「協調性がない」「わがままで自分勝手」「反抗的ですぐに怒る」という特性がありますから、周りの見方が厳しいです。人は対等と見れば見るほど見方が厳しいのですが、わざとではないし、ふざけているわけでもないのです。状況が読めない、他者感情が理解できない、見通しが持てない。それでどうしたらいいか分からず逸脱行動が起こります。だから、怒るのではなく、明確に叱ってあげてほしいのです。

頭ごなしに怒り続けると、二次的症状が出るので、それは予防しないといけません。障がいは、一次的症状である脳の特性が行動に表れている状態で、発達障がいの特性そのものです。でも、さまざまな経験の繰り返し、特に失敗の繰り返しによって、やる気が起こらなくなってしまいます。そこで、やる気のない子だ、努力をしない子だという見方をしてはいけません。また、無理強いや叱責、注意の繰り返しから、ストレス、不安、自信喪失、意欲の低下が引き起こされます。ですから、関わりと環境が非常に大事なのです。

18. 注意の仕方

注意は肯定的にしてあげてください。「○○をしたら駄目ですよ」から、「○○をしたら丸ですよ」に変えるのです。これをリフレーミングといいます。「走ったら駄目ですよ」と優しく言っても駄目を出しているから同じことなので、毅然と「歩きましょう」と言ってください。これは丸で示しているので強く言っても大丈夫です。こういう丸で示す指示をすると、周りの子も「○○ちゃん、歩こう」と言ってくれます。バツばかりを出すのではなく、丸で示すことが必要です。

叱り方のコツとしては、長く叱っても半分以上聞いていないので、短くはつきりと明確に叱ってください。どう行動してほしいかを分かるように、丸で示してください。「走ったら駄目です」、ではどうしたらいいか、「歩きましょう」。「うろうろしたら駄目です」、ではどうしたらいいか、「座りましょう」と明確に言いましょう。

それから、特にASDタイプの子は、他者感情が分かりません。相手はどう思うかが分かりません。そこが永遠の課題なのです。だから、自分だったらどう思うかという、自分の気持ちに変えるよう考えさせる方向に持っていくといいです。

それから、一般論で話す方が、子どもたちにはよく分かります。特に厳しいことを言うときには、「あなたは」よりも「5歳児は」と一般的な言い方をした方がいいのです。一般的なルールなら、かたくなに守り通そうとするので、あえてそこを使っていく。そして、行動は修正するけれども人格は否定しないことがポイントです。

虐待を受けている小学生がいて、母親に回し蹴りをされて歯が半分ありませんでした。私はその子が釣りをしたことがないというので、釣り堀に連れていきました。行く前に「何でおまえと行かなあかんねん」と言われました。よくそんなことを言うのですが、釣りをしているときはうれしそうでした。また、とても器用でした。発達障がいの子は不器用ですが、愛着障がいの子は器用なのです。

ぜひ、子どもたちを叱ってください。怒るのには、感情的に自分のストレスを発散しているという面もあります。しかも、内容は過去のことが多く、怒りと勢いで自分の言いたいことを感情に任せて言っていることが多いです。そう



ではなく、子どもの将来のために、理性的に叱らなければいけないのです。「うるせえ」とか、子どもたちはよく人の感情をそこまで逆なでできるなという言葉をとくさん知っています。叱ることは勇気が要りますが、私は明確に叱ってきました。皆さんの園には、愛着に課題のある子も、発達障がいのある子もいると思いますが、叱り方は同じです。小さい子はまだ失敗は許されるので怒らなくてもいい、明確に叱ればいいのです。叱っていると子どもは反発しますが、それは当たり前です。特に愛着に課題のある子は、毎日そういう言葉を言われていて、虐待やネグレクトを受けている可能性があります。親にはそのつもりがなくても、子どもにとってそれでつらい思いをすれば愛着形成不全になります。

私は、その子にソーシャルスキルを付けようと、「その釣った魚を料理してもらうように、あの人に言ってきなさい」と言ったのですが、「何でおれが行かなあかんねん」と反発しました。しかし、僕は「アホ」と言われても「おじさんは賢いよ」と言ったり、「おっさん、うざいねん」と言われても「おじさんはさわやかだ」と言ったり、何を言われても必ず前向きに、その逆の言葉を言うようにしています。そうすると、子どもはその言葉を覚えるのです。帰りには「さわやかなおじさん、ありがとう」と言っていました。これをリフレーミングといいます。子どもは、先生方がよかれと思って一生懸命関わっているのに、誰かから言われた嫌な言葉をつい言うのですが、それが子どもで、本心ではないと捉えてください。だから、その真逆に考えると腹も立たないし、その言葉を伝えることでその子は覚えるので、良い言葉をたくさん言える子にしてください。

それから、1学期間を振り返ると、先生方は子どもを叱ったり、褒めたり、いろいろなことをされたと思います。でも、先生方は褒めてもらっていますか。子育ては本当に大変で、特に発達に課題のある子どもを育てるのはとても大変ですが、母親は褒められるどころか、良くない行動を自分のせいにされる、それも最愛の旦那さんや実の両親に言われることも多くあります。お盆の里帰りもつらいです。でも、そんな自分を自分で褒めないといけません。叱ると疲れます。甘い物やお肉やアイスを食べたり、ささいなことでいいので、子どもを褒めた自分を自分で褒めて、また明日から褒めてあげよう、こんなふうに言われたらこう言ってあげようとする、こんなことが幸せだと思います。そんな

小さな幸せを積み重ねていってください。

19. 得意なことや興味のあることの尊重

ぜひ得意なことは褒めてあげてください。アリにとっても興味がある子は、昆虫学の博士になるかもしれません。そのこだわりは発達のエネルギーです。以前、水に大変こだわっていた子を、いろいろな苦労がありましたが近畿大学水産学部部に推薦で入れました。その子は大学院まで6年間、クロマグロの完全養殖を研究し、クロマグロを大人にし、卵を産ませ、またそれを大人にするという完全養殖のサイクルをつくりました。だから、何かにこだわっていたらそこから広げていく、これは発達のエネルギーです。ただし、悪いことにこだわっていたら、それは修正しなければいけません。

20. 不安やストレスの対処

子どもたちの不安やストレスへの対処としては、ぜひストレスコーピング、どのように嫌な気持ちをコントロールするかを教えてあげてください。両手で鉛筆を持ったまま思い切り握りしめ、肩にも顔にも力を入れます。それで1から5まで数えて、ゆっくり力を抜きます。このように力を入れる、抜くのメリハリを教えてあげます。

園でいろいろなものを準備するのは予算に限りがあるので、インターネットから子どもの好きそうなものをスクラップブックにして貼って、それを眺めることでほっとできる子もいます。子どもにとって何がリラックス材料になるかを考えることが大事です。

21. パニックへの対処

パニックが起こったら、収まるまでそっと待ち、その根源となる所から離してください。ただ、距離があるとよくないので園長室などには連れていかず、できれば保育室や教室に簡単なついたてやボックスを並べて小さな隙間をつくとよいでしょう。ちょっとほっとできる場所があればいいのです。あまり他者から離さずに、リラックスできる環境をつくるのが大事です。

パニックが収まったら、「我慢できたね」と褒めてあげます。パニックの最中に「何であんなことをしたの?」と聞くとまたパニックが復活するので、じっ



くり待って、落ち着いたら、会話ができる子であれば穏やかに話を聞いてあげることが大事です。

ある小学校の廊下に、段ボールでできているリラックススペースという子どもたちがほっとできるスペースがあります。こんなものが見えるのかと見ていると、授業中に子どもが入りました。でも、こんなものがあつたら癖になるのではないかと思ったのですが、2分でタイマーが鳴り、出てきました。すると、その子の表情はとても良くなって、また笑顔で教室に戻りました。

少し違和感があつたので、その子の教室に行って、他の子に廊下の段ボールの部屋に入った子のことを聞きました。すると、「おじさんは何も分かっていない」と、小学2年生の子にひどく怒られました。この学校では、誰もがその部屋を2分間だけ使っていていいことになっているそうです。まさに、ユニバーサルデザインです。

もし、あの部屋はパニックを起こすAちゃんのためだけの場所で、みんなは授業中にあそこに入ったら駄目だとなつたら、そこで差別化が起こります。そうではなく全員使っていていいのです。最初は殺到したそうですが、みんな1回入ったら安心するのです。「何であの子だけ」という言葉を言わせては駄目で、「あの子だけではない。みんなもやってほしかったらやってあげるよ」という配慮を、全ての子にできることが重要なのです。

支援とはユニバーサルデザインで、特定の子もだけの幸せを考えるのではありません。人は一人で生きておらず、周りとの関係、人との関係の中で支え合って生きていくものなので、その子も周りも同じようにしていく。ふりがなを振った方が分かりやすい子は他にもいる。はさみで上手に切れるように、手掛かりの線を書いてあげたら、「このように書いてあげたけど、やってほしい人いる？」と、みんなにも聞いてあげてください。そのような支援をみんなに広げていくことで、全ての子どもが困らないようにすることが究極の目標です。

発達の障がいのある子にはこんなことをしなければいけないと考えるのではなくて、その方法を最初から全ての子に使うことで、全ての子が困らないようにするという支援が、今は必要なのではないかと思います。発達障がいのような特性のある子どもがたくさんいる時代なので、そのような支援を目指していただけるとありがたいです。

これは取り合いをしている様子です。言葉で言い合いをしていたので、じゃ

んけんで決めてはどうかと提案すると、じゃんけんをして、「ありがとう」と言ってくれました。素直な子です。

こちらは姿勢のモデルで、良い姿勢をしている子を先生が褒めたところ、みんなまねをして、それをまた褒めたらとても効果的だったようです。実は、このクラスにはとても多動な子がいるのですが、その子もまねをして一生懸命座りました。

また、黒板に字を書くために先生が背を向けると、それが逸脱の瞬間になります。そこで、ある先生は工夫をして、既を書いてあるものを貼るという方法で、できるだけ子どもの方を見て授業をしているそうです。そうすると、子どもはとても集中できます。また、教卓の上にタイマーを置き、時間の見通しを示しています。

中学生になると、姿勢が悪くて誤解を受けるようになります。ある子は、生意気に思えるのですが、実はとても優秀で、挨拶もきちんできます。でも、やはり人は見た目が9割で、姿勢が悪いと「何だこいつは」と思われてしまいます。これも習慣なので、姿勢面の支援は幼小の頃からしてください。正しい姿勢で椅子に座れる、正しく鉛筆を持てる、正しく箸を持てるといったレディネスのところを、ユニバーサルデザインで支援していくことが大事です。

私は障がいのある子と一緒に、よくキャンプに行きます。中には虐待を受けている子や自閉症の子もいます。最初は障がいのある子なんて3分もじっとできないから、釣りなんてできないだろうと言われましたが、そう言われると僕は余計ファイトが湧いてうれしいのです。絶対に釣らせてあげようと、朝5時に起きてまき餌を運び、何個も海に投げ込みました。子どもたちが到着してサオの準備をしている間に、海には魚が湧いていました。試しにサオを入れてみると、餌を付けていないのに釣れました。3分とじっとしてられないのなら、3分以内に釣れるようにしようと思ったのです。

1人で300匹近くも釣った子もいて、釣り場の方は驚いて、誤解していたと謝りに来ました。そして、魚を調理してくれました。魚を食べられなかった子が、自分で釣った魚は食べられました。これが正しい障がい理解の啓発の仕方だと思います。

これはイルカセラピーの写真です。アニマルセラピーにもいろいろありますが、自閉のある子にはイルカセラピーがいいと言われています。ただ、イルカ



の排せつ物には寄生虫がいるので、顔を入れて海の水を飲むような子どもにはイルカセラピーをさせては駄目です。また、イルカは危険な動物で、機嫌が悪いと噛むので、そういうことを理解した上でさせないとはいけません。

22. 特別な支援は全ての子どもの支援

今、国では特別支援教育と言っていますが、困っている子だけの支援であってはいけません。やはり特に就学前は、全ての子どもに分かりやすいことが大事だと思います。また、全ての子どもにとって参加しやすい活動を工夫すると、困っている子も困らなくなると思います。先生方は、困っている子どもだけをマン・ツー・マンで支援しているのではなく、園で集団をターゲットに支援しています。だからこそ、一人ひとりの支援は大事です。大事ですが、それを集団の中でどうしていくかというときに、困っている子どもだけではなく他の子にも同じように対応する。だから、悪いことをしたら、同じように叱る。そこを忘れてはいけません。それが他ならぬ他の子たちの支援にもなります。「なぜあの子だけいつもうろうろしているのに怒らないの？」とみんな思っています。毅然と「座りなさい」と言ってください。「そうか、先生もああやって言っているんだ。僕たちもがんばってやろう」。そして集団が座れば、その子も座るのです。そういったことが大事です。そして、全体が落ち着いてくると、活動意欲や能力が向上します。それは全ての子どもにつながるものです。子どもだけの努力を高める、という視点のみならず、環境面を変えて学びやすい環境をつくってあげることも大事にしなければいけません。

そして、できるだけ分かりやすい活動が必要です。今の子は難しい言葉を使いますが、そんなにしっかりしているわけではありせん。以前と同じように、童謡といった簡単なレベルの活動が分かりやすいと思います。

さらに、園には同年代の子どもや、上級生といういい先生がたくさんいます。子どもたちが、お互いに支え合える環境をつくる。例えば、ASDの子が何かにこだわっていたら、その子を先生役にすれば、みんなから一目置かれます。子ども同士でどう支え合っていくか、それをどう評価するかで変わります。みんなからばかにされると、やらないでおこうと、どんどん引込み思案になります。お互いをばかにしない、失敗をばかにしない雰囲気をつくるのが、子ども同士が支え合うクラスにつながります。

今、「アナと雪の女王」の「Let It Go」がはやっていますが、子どもたちはありのままがいいのです。それが素直な表現なのです。ぜひ「雪だるまつくろう」のあの歌と共に、そういうことを教えてあげてください。

23. とともに学び、ともに育つために！

「ともに学び、ともに育つ」は、大阪府がずっと大事にしてきたことです。私はもう大阪府を離れているのですが、やはりこの言葉は大事だと思います。特別な子だけを特別に指導するのではなく、ともに学び、地域の中でともに育っていくようにすることが大事だと思います。

皆さん、1学期を振り返ってみて、こういう特性のある子どもがクラスにたくさんいて、指導につまずいて、先輩に怒られて、「自分の保育は駄目なのか」「自分には能力がないのか」と思っていないですか。クラスにそういう特性のある子どもがたくさんいてうまくまとまらないのは、誰のせいでもありません。子どもも先生も悪くはありません。お忙しい中、研修に来ている先生が、悪いわけがありません。

子どもたちはなぜ笑うかご存じですか。大好きな先生が笑顔でいてくれるからです。「支援がうまくいかない」「保育がしんどい」と思っていると、暗い表情がふと出てしまいます。つらいと思ったときは、一度鏡を見てください。すごくつらい顔になっているはずですが、自信を持ってください。子どもたちはどんな理由であっても、絶対に自分を毎日支えてくれる先生のことを嫌いなわけはありません。「嫌いや」「あっち行け」と言いますが、「大好きやろ?」「こっち行け」とリフレーミングしてください。それでもつらいときは、トイレに行って顔をもんで、口角を5度上げて、目尻は7度下げてください。私は高等学校で生徒指導をしていたので、特別支援学校へ移ったときにそうして笑顔をつくるよう言われました。今でも、女子大生の前で満面の笑顔で授業をしていると、学生も笑顔で授業を聞いてくれています。

先生方が笑えなければ、子どもたちは笑顔になれません。これだけ一生懸命やっているのですから、自信を持ってください。発達障がいの子供たちはやりにくいですが、暗くならなくていい、誰も悪くない、誰も責めなくていい。そういう環境で笑っていてください。そうしたら子どもたちは笑えます。ぜひ大人も子どもも楽しめて、笑顔で毎日を過ごせるような保育環境をつくって



ださい。発達障がい、障がい、そんな言葉に臆する必要はありません。ありのままに、いつもどおり自信を持ってやってください。そして、今日学んだ情報を保育所、保育園、幼稚園でぜひ共有していただけたらありがたいと思います。ご清聴ありがとうございました。（拍手）